

行政視察報告書

平成30年10月16日

知立市議会議員 田中 健様

報告者 民友クラブ 稲垣達雄
日時 平成30年10月11日(木)～12日(金)
視察(研修)場所 長岡市 シティホールプラザ「アオーレ長岡」
目的 第80回「全国都市問題会議」
議題 「市民協働による公共の拠点づくり」
参加者 2,006名 主催団体関係者 62名 合計2068名



アオーレ長岡



都市問題会議

概要

(主催)
全国市長会
公益財団法人 後藤・安田記念東京都市研究所
公益財団法人 日本都市センター
長岡市

(協賛)
公益財団法人 全国市長会館

講師・報告者	団体名・役職	氏名
基調講演	東京大学史料編集所教授 「地方分権へのまなざし」	講師 本郷和人
主報告	新潟県長岡市長 「長岡市の市民協働」	磯田達伸

一般報告 三重県津市長 前葉泰幸
「市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント」

一般報告 建築家・東京大学教授 隈 研吾
「場所の時代」
筑波大学客員教授 森 民夫
アートディレクター 森本千絵

【パネルディスカッション】

テーマ「市民協働による公共の拠点づくり」

コーディネーター 明治大学政治経済学部地域行政学科長・教授 牛山久仁彦

パネリスト 東京理科大学工学部建築学科教授 伊藤香織
シビックプライド情勢のコミュニケーションポイントから考える「拠点」

パネリスト NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長 奥山千鶴子
子育て支援から見た公共の拠点づくり

パネリスト 長岡市国際交流センター「地域広場」センター長 羽賀友信
長岡の市民主体のまちづくり

パネリスト 埼玉県和光市長 松本武洋
NPOとの連携

パネリスト 高地県須崎市長 楠瀬耕作
ヒト・モノ・金の好循環を目指して

第1日 10月11日(木)

9:30 開会式

9:50 基調講演「地方分権へのまなざし」

本郷和人

11:00 主報告「長岡市の市民協働」

磯田達伸

12:00 休憩

13:10 一般報告「市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント」

前葉泰幸

14:20 昼食

14:40 一般報告「場所の時代」
アオーレ長岡発注者として
アオーレ長岡での市民協働の実践

隈 研吾
森 民夫
森本千絵

17:00 終了

(2)

基調講演「地方分権へのまなざし」

東京大学史料編集所教授 本郷和人

1) 日本は昔から中央集権か

日本人は、小学校の時から「古代の昔から日本は統一国家であった」と言う歴史教育を受ける。「一つの民族、一つの言語、そして一つの国家」を形成してきたのが日本である、と教えられる。確かに万世一系の天皇と皇室を載く国柄として、その指摘は正しいのだが、そうした視点ばかりが共有されて行くことに、問題がない訳ではあるまい。本当に日本は古くから、都を核としてまとまる中央集権の国だったのか？

2) 貨幣を例に

708年に铸造された和同開珎は、日本最古の貨幣として知られる。統一貨幣の流通は国が成立するうえで大事な要素である。しかし、和同開珎が日本列島の隅々まで流通していたわけではないと言う史実である。日本列島に「貨幣経済」が浸透したのは鎌倉時代。日宋貿易によって膨大な量の銅銭が齎された後の13世紀の2四半期（1226年～1250年）であると考えべき。

3) 地方行政の形骸化

古代の日本では地方行政の単位として「国」が置かれていた。国を司る行政官として国司が任命されていた。国司は、4段階（があり正確に言うと守、介、掾、目の官がある。最も上位に任命されることが今でいう県知事になるに等しい。しかし守に任命された人は、自身の任国に赴いて生活するのではなく、現地には部下を派遣し、自身は中級の貴族として京都で暮らす。実質的には現地に丸投げし、受納し易い税を吸い上げる程度の関わりしか持たず国の政策や意向が現地に浸透するはずもない。あくまで地方の論理が優先的に働いてゆく。地方行政の形骸化は朝廷から統一的コントロールが届かないことを意味する。自分の土地は自分で守ると言う自力救済を必須とする状況でもある。そうした事から地域の有力者は武装して他社の侵略を防ぐ。これが源氏や平家など、武士の誕生に他ならない。

4) 地域の特色

日本は流通が盛んであった西国から開け、発展を遂げた武士が平家であった。東国の源氏は農業生産を基盤としていた。農業技術が拙劣な段階のため限られた生産力であった。一方流通といった活動に依拠する平家は容易に勢力を強化できた。特筆すべきは平家が重視した日宋貿易である。平家は葉片や福原（神戸）を拠点に宋と交易を行い日本国内の流通に多大な影響をもたらしたのは膨大な貨幣が流入してきたことである。範囲が限定される物々交換～貨幣による取引に移り日本各地で物流が拡大し、互いが緊密な連関を持ち始めることを意味する。地域ごとに完結、断絶していた時を経て列島が有機的繋がりを持つ要因として銭の流入が挙げられる。このことで遠くの地域との交易が進み、特に京都と蝦夷、また京都と博多を結ぶ日本海公易が盛んになり、各地で製造された焼き物や北海道の海産物が都に運ばれるなど、瀬戸内海公益は博多から瀬戸内海を通して畿内へと抜ける経済の主要なルートになった。

5) 武士と地方

日本の歴史は天皇の歴史であるとともに、武士の成長の歴史とも言える。勢力を強めて行った武士たちが支配権をどの様に拡大していったか。鎌倉時代は東国に幕府、西国に調停が位置する格好になる。朝廷に対し幕府が勢力、権力が優勢になった契機としては、1221年の承久の乱がある。

関東の武士たちが西国へと進出していく結果をも呼び込んだ。西国に分布する上皇の所領、上皇に味方した貴族たちの所領を取り上げ御家人たちに配分していった。但し、この時点ではまだ関東の武士たちは、所有する土地の増加を直ぐさま支配権の、拡大に直結させることが出来なかった。鎌倉幕府に所属する御家人たちは、当時、先ず自身の本領を関東に持ち、何より大事な本拠とした。この地に所有し領有する土地は、派出所的な意味合いを持つ鎌倉の屋敷地であったり、同じ性格の京都の屋敷地であったり、戦功によって新たに獲得した西国の領地などとなるため、それぞれが遠く離れて存在していた。彼らには所有地なり領地を（一円地）としてまとめる、集中的に保持する概念がなく、そのため自身の領土を管理することが容易ではなかった。家の領地をまとめて発展の為の努力を傾ける事もままならず、他社の侵略にも遭いやすい。この様な状態では、広域的かつ統一的な支配を視野に入れられるほどの有力な武士勢力が出現することは、まだまだ困難であったとはいえ、一定のまとまりを持った有力な武士勢力が存在しなかった訳ではない。

鎌倉幕府は各地方の国ごとに行政官である守護を設置した。守護は立場上、その国の武士たちを主導する存在になった。彼らはどれ程の規模の権力主体になりえたのだろうか。守護がそれぞれの管轄地域に対して行う役割は、いわゆる大犯三箇条と呼ばれるものとなる。具体的には、殺害人の逮捕、謀反人の逮捕、加えて天皇家の警護に当たる京都大番役の催促である。誤解してはならないが、守護はこれら「大犯三箇条をはじめとする諸々権限」を行ったのではない。「大犯三箇条を遂行する権利だけ」しか許されていなかったのである。いざ合戦となれば守護はその国の武士を率いる立場にあったと言われているが、実のところ守護とはわずかに決められた権限に従って役割を果たす、いわば「役人」だったのだ。守護が「役人」の段階を超えて、配属された国を一円的に支配するようになるのは室町時代である。そうした守護を守護大名と呼ぶ。更に15世紀後期頃から守護大名の一部は戦国大名となり、一国を軍事的にも経済的にも支配下におさめて税制も整備する一方、領内における争いの調停など領民に対するサービスを行い、権力主体としての総合的な機能を備えてゆく。様々な地方で武家による権力機構が整えられてゆき、日本列島に小さな国がいくつも生じるようになった、と見ることができる。戦国大名が優勝劣敗を繰り返すうち、日本列島全体を網羅する統一権力が生まれてくる。それは言うまでもなく織田信長や豊臣秀吉によって主導された成果である。日本全国を本当の意味で一つの国家とみなすことが出来るのは、ようやくこの時点、16世紀も終わりに近づいてのことかもしれない。

所感

都市問題会議のテーマ「市民協働による公共の拠点づくり」について
基調講演「地方分権へのまなざし」と題して、ものを見る時の目のようす、目つきについて、日本の歴史に残された地方分権をしっかりと把握して、会議に臨むべきと本郷先生は言いたかったのでしょうか。先生の講演の中身は次の通りである。

①江戸時代300人の諸大名が其々の藩、地域で教育があり英才が育てられた。

②黒船が生み出した「明治維新」。世襲に囚われず才能を登用する。

立身出世をよしとする＝全国各地の英才が東京に集まる。

万世一系の天皇を核とする、強力な中央集権が図られ、列強に対抗する。

③明治の達成は高く評価するとして、それは300万人の犠牲出した太平洋戦争に直線的に結びつくのか否か。過度な受験秀才の重用をどう捉えるか。

④日本歴史「黒船」が来ない＝弛緩する。

たまに「黒船」が来襲する＝変革を志す。

⑤現代の黒船は何か？人口減だと思ふ。今こそ、明治の中央集権とは逆に地方の自治権を強く後押しすべきである。地方からボトムアップこそが新しい日本を支えて行く。

本郷先生の基調講演を理解する中で、主報告「長岡市の市民協働」また、一般報告「市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント」そして、一般報告「場所の時代」、何れの報告についてもしっかりと受け止めることができました。

第2日 10月12日(金)

9:30【パネルディスカッション】

テーマ「市民協働による公共の拠点づくり」

コーディネーター

明治大学政治経済学部地域行政学科長・教授

牛山久仁彦

パネリスト 東京理科大学工学部建築学科教授

伊藤香織

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事長

奥山千鶴子

長岡市国際交流センター「地域広場」センター長

羽賀友信

埼玉県和光市長

松本武洋

高地県須崎市長

楠瀬耕作

11:50 閉会式

次期開催市 市長挨拶 鹿児島県霧島市長

中重真一

閉会挨拶 日本都市センター理事長 高島市長

大西秀人

休憩

昼食

行政視察(長岡市主催)

実施日：10月12日(金) 全国都市問題会議閉会式終了後

各コース案内

- A：寺泊のトキと魚の市場通りコース
- B：与坂のビール園と兼統お船ミュージアムコース
- C：山古志の闘牛と復興交通館コース
- D：生ごみバイオガス発電センターと歴史体験コース
- E：雪上車と酒蔵の産業観光コース
- F：醸造のまち摂田屋地区コース
- G：偉人記念館と米百俵の群像コース
- H：アオーレ長岡と中心市街地コース

Dコース 生ごみバイオガス発電センターと歴史体験コース

- 12：40—会場(出発)
- 13：00—生ごみバイオマス発電センター着(1時間滞在)
- 14：30—馬高縄文館着(30分滞在)
- 15：15—江口だんご店着(30分滞在)
- 16：15—長岡駅着(解散)

1) 事業概要

燃やすごみの量を減らすため、従来の焼却、そして焼却灰の埋め立てといった処理を資源化する。生ごみを微生物の力を活用して発酵分解し発生するバイオガスを発電に利用。残渣も燃料として売却、即ち、生ごみを100%利用する。1日に65トンもの生ごみが処理出来る、全国の自治体では最大規模を誇っている。

2) 事業方式

PFI事業(BTO方式～建設後に所有権を市に移管し、その後運営・維持管理を行う。)

事業契約先：(株)長岡バイオキューブ

*特別目的会社 代表企業：JFEエンジニアリング(株)他4社

事業期間：平成23年3月から平成40年6月まで

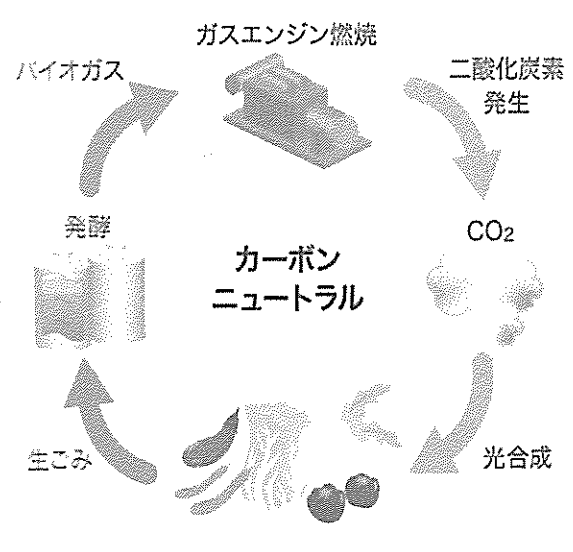
事業契約額：約447億円(設計・建築費19億円運営・維持管理費28億円)

3) 効果

- ①焼却するごみの量の減少(24年度比30%減少)
- ②焼却施設の統廃合や焼却灰を埋める最終処分場の延命等15年間で35億円の削減見込まれる)
- ③年間2,000トンの二酸化炭素を削減(一般家庭420世帯分)
- ④年間410万キロワットの発電(一般家庭1000世帯分) (6)

CO₂削減に役立つ バイオガス利用

バイオガスは、光合成でCO₂を吸収する植物から作られるため、燃やしても植林や農作業により再び大気中のCO₂を吸収します。これにより、バイオガスをエネルギーとして利用しても大気中のCO₂が増加することはありません。バイオガスを化石燃料の代わりに利用すれば、CO₂の排出を抑制することができます。



所感 長岡市は平成16年10月から「なかおかごみ改革」に取り掛かり家庭系のゴミの一部有料化・資源物の分別収集や集団収集、拠点回収等の資源化を実施、減量化と資源化を推進してきた。また、平成25年3月に策定した長岡市一般廃棄物（ごみ）処理基本計画では、「環境に優しい循環型社会の実現」を基本理念として、市民・事業者・役割分担を明確にしながら、3R（リデュース・リユース・リサイクル）と適正な処理・処分を推進してきた。そして平成30年度から平成39年度迄の10年間を計画期間とする新たな「長岡市一般廃棄物「ごみ」処理基本計画」を策定し、更なるゴミの減量屋資源化に加え天然資源の消費を抑え、次世代に繋げる循環型のまちづくりを進めている。こうした取り組みこそ、“市民協働による公共の拠点づくり” “にと呼ぶに相応しい市民と行政、また市民同士が課題を解決し、未来に向けて魅力的な街づくりを進めて行くことが目指されます。協働により生まれた施策は、机上の空論でなく市民の知恵が反映されたものとなるであろう。知立市もゴミ減量には最善を尽くしておりますが、更に、長岡市の進める「一般廃棄物（ごみ）の処理及び、資源化計画については、当市も大いに参考すべきである。